

## 20世紀 負の遺産



京都大学大学院工学研究科環境工学専攻

工学博士 武田 信生

Nobuo Takeda

第二次世界大戦のみじめな敗戦ののち、わが国の経済は奇跡的な速さで復興を遂げ、その後の経済発展には目覚ましいものがあった。しかし20世紀も終わりに近づくと、バブルの崩壊、廃棄物問題の深刻化など、いわゆる負の遺産といわれるものが次から次へと表面化していった。この30年ほどというものは、おおざっぱに言って前半は光、後半は陰が支配的にわが国を覆ってきたように見える。

PCB およびその汚染物、ダイオキシン類汚染物、豊島や青森・岩手県境における不法投棄廃棄物などは最も明確に、目に見える形で現れた負の遺産である。これらの他にも、土壌・底質の汚染や不適正埋立など、潜在している負の遺産も多くあるものと推定される。また、いじめや不登校といった、いわば無形の負の遺産もある。

顕在化していた負の遺産の始末もついに21世紀に持ち越されてしまった。ただ、PCBの処理や豊島の再興はやっと緒について、曙光が見え出したことは何よりのことである。一般に廃棄物のいかげんなあつかいは後に十倍、いや百倍ほどのコストがかかってしまうことになることが教訓として残ることになるだろう。

負の遺産が21世紀にまで持ち越されることになってしまったのについては「シャカリキ」になってこれを精算しようとする人がなかなか現れなかったことにもよると考えられる。近頃は誰もがいやがるような仕事をしようとする人が少なくなってしまうように感じられる。筆者は、この問題は20世紀後期の文化の問題、とくに言葉の問題と象徴的に繋がっているように考えている。

20世紀の文化は物やエネルギーを使い捨てしてきただけではなく、言語までも使い捨てにしてきたのではないのかということである。次々と新しい言葉が作られ、その概念もあいまいな状態のままに使い捨てられていく。そのような文化の中にこそ問題の本質が含まれているのではないのかという疑問である。あらゆる行為や言葉は無責任、その場逃れとなり、無難なこと、きれいごとだけがまかりとおる。そのような世の中になっていたのではないであろうか。

いま、「循環型社会」という言葉がいろいろな分野で使われてきている。この言葉が広く支持されてきていることは好ましいことではあるが、一体この言葉の意味や意義が深く議論され考察されているのかというと、はなはだ心もとないことではある。この言葉自身が20世紀の遺産的意味しかもたないようにならないことを祈るものである。